



最終号

本紙は、ピースボート災害ボランティアセンターが、石巻市内の仮設住宅に向けて発行・配布する無料情報紙です。毎月10日、25日発行。

4月16日ボランティア活動 感謝のつどい
いま感謝のきもちを
 震災当時、東北の地には国内外から多くの支援が寄せられ、石巻にも大勢のボランティアが駆けつけました。アが駆けつけました。苦しいときに助けてくれたボランティアに感謝を伝えたい、その気持ちは多くの方が抱いているのではないのでしょうか。
 4月16日、石巻専修大学で「ボランティア活動感謝のつどい」が開催されます。あれから5年、当時復興のために全国から集まったボランティアを石巻に招き、あの時言えなかった「ありがとう」を伝えます。同イベントにかける思いを、ボランティア活動感謝のつどい発起人代表・萬代好伸さんにお聞きしました。

今回のイベント会場となる石巻専修大は震災当時、ボランティアたちの活動拠点でした。「風呂にも入らず、酒、娯楽に興じることもなく、高い志を見せられてくれた」。当時のことを思い出し、萬代さんの語りにも自然と熱のボランティアの皆さんは、食料はもちろんと TENT や寝袋まで持参し、被災地に負担をかけることなく自己完結していたよ」
 イベントが4月に予定されていることにも意味があります。「何度も振り返る姿に、皆さんのおかげで再びきれいになった石巻を重ねて見てほしい」。萬代さんが言うように、震災によって灰色になった石巻の景色が彩りを取り戻したのには、ボランティアの貢献も大きかったで

【日時】 4月16日(土) 12時〜17時
 【場所】 石巻専修大学
 【内容】 豚汁、石巻焼きそばのお振る舞い、太鼓演奏、感謝のメッセージ、トークセッション、ボランティア同窓会、集合写真撮影等
 【問合せ】 080-12812-8443 (五十嵐)

3月のイベント情報

■女川町復幸祭2016
 今年で5回目となる女川町復幸祭。炭火焼き秋刀魚の無料配布、多数の出店、魅力あるステージ等、一日中楽しめます！
 日時：3月26日(土) 10時〜16時
 会場：女川駅前広場シーパルピア女川周辺
 問合せ：女川町復幸祭実行委員会 0225-24-8118 (担当：今野)

■ばしふいっくひいなす歓迎
 ウェルカムフェスタ 2016 in 石巻
 日時：4月1日(金) 12時〜21時10分
 ※打ち上げ花火は20時50分頃〜
 場所：石巻港大手埠頭
 参加費：入場無料
 主催・問合せ：石巻港大型客船誘致協議会 0225-95-1111 (内線5608)

アルコールを飲まない生き方を続けるために
 被災地では、先行きが見えない不安やストレスから飲酒の量をコントロールできず、アルコール依存症になる人が増加するといわれています。アルコール依存症は病気であり、本人の意思で断酒をすることは大変困難です。そこで有効といわれているのが、アルコールの問題を抱える当事者同士の集まり、AA(アルコールホーリクス・アノニマス)です。AAのミーティングでは、まず自分がアルコール依存症であること、他のアルコール依存症の人たちと経験や希望を分かち合っており、共通する問題を解決していきます。AAのメンバーになるために必要なことはただ一つ「飲酒をやめたい」と願うこと。匿名で、会費もありません。目標は「今日一日飲まない」こと。それを続けていくことこそ

が、アルコール依存から脱するための唯一の方法なのです。周りに必要な方がいたら、ぜひ教えてあげてください。
 (ピースボート あき)
 ◆毎週火曜14時〜15時半/蛇田公民館(ケーズデンキ近く)
 ◆第1・3金曜18時〜19時半/女川フューチャーセンター(Cameras)(女川駅近く)
 【問合せ】 AA東北(022-276-5210)

ボランティアの声

記者ボランティアとして、仮設団地での親子運動会取材しました。団地内の老若男女が盛り上がったこのイベントで、住民さんたちの「どんな状況でも、子どもにはいつも笑顔であってほしい」という思いやりに触れ、貴重な体験ができました。(東京都 さとし)

第16号から新聞の配布に関わってきまして、人と接するのが苦手な僕がこんなに長く活動できたのも、石巻で出会った住民さんや仲間のおかげでした。正直に言うと、ボランティアをして来たというよりは、むしろ自分が周りの人達に支えてもらったという感覚です。本当にお世話になりました。

新聞は終わっても、ここでの様々な出会いは死ぬまで終わらないと思います。なので、皆さんこれからもよろしくお願ひします。(島根県 ふる)

キーンと冷えた空気の中、声を掛ける裸足のまま出てくるアナタ。「寒いだろ、後ろさ閉めて中さ入れ」。いつもの挨拶から、他愛もない話が始まる。通路を歩いていると、いい匂いがする。夕食の支度を始めているアナタの姿が、ガラス越しに見える。声を掛ける。「あら、しばらく！最近留守の時に来てたみたいだったから、会えてよかった」と笑顔が返ってくる。いろいろな人の暮らしの中を歩き回り、アナタと出会い、「またね」と言っ別れてきました。最終号が決まってからは「またね」で別れない日が来るのかなと少し寂しい気持ちもありました。また住民さんからも、最終号を残念がる声や感謝の言葉を沢山いただきました。同時に、「あなたはどうか？地元に戻るの？いい加減、自分の人生考えなさい」と心配もしていたきました。この場で進路報告ができた良かったのですが、まだ決まっていなもので、お会いしたときにお伝えします。一つ言えることは、もうしばらく石巻にいます。そう決めるから

第112号の配布では、住民さんから「これまでありがとう」と沢山声を掛けていただきました。住民さん、ボランティアの皆さんとの出会いは、忘れられない大切な気づきになっていきます。素敵な出会いを本当にありがとうございました。(東京都 かおる)

真如苑救援ボランティア(SeRV)の石巻スタッフとして、昨年7月から新聞の配布に携わってききました。私たち自身も被災者ですが、「県外からのボランティアの方々を支えられるだけでなく、地元に住む我々が出来る事をしなければ、本当の復興に繋がらない」という想いで活動を始めました。

新聞配布を通じ、様々な出会いがありました。ときには、震災当時の悲しいお話を伺い、一緒に涙することもありました。「アナタに話して良かった！心が軽くなった！」という言葉をいただいた

は、最終号を配りに行くときも「またね」で別れようと思うようになりました。立場や住む場所が変わろうと、私は私、あなたはあなた。私とあなたは違う人。だから尊い。時にめんどくさいこともあるけれど、そこも違いがあるからおもしろい。私は故郷を保持したい。根無し草。あなたには木も知れないし、花かもしれない。喜怒哀楽が養分になり、光を浴びて、踏まれて強くなって、私とあなたはここにいます。きつと、この新聞を通じて、たくさん「私とあなた」の物語ができたと思います。最終号のこの新聞は、物語の最後のページではなく、ただのしおり。これからたくさんのお話が続くことを願っています。

◆ピースボート災害ボランティアセンター「仮設きずな新聞」配布統括 田上琢磨

土の人と風の人と

仮設きずな新聞最終刊に寄せて Vol.4

ときには、こんな自分でも相手に寄り添うことができて良かったと感謝がわきました。また「以前来てくれたボランティアさんから手紙やハガキをもらったのがうれい」という声をよく耳にし、地元住民として、この5年間でピースボートさんが築いてきた信頼に改めて感謝がわきました。私たちが自身も、全国各地からやって来るボランティアさん達と一緒に活動できることがありがたく、うれしく、また元気をもらいました。

◆真如苑救援ボランティア(SeRV) 山口きよえ・林 弘子 山口貴子・梶原真希子

土の人、風の人という言葉がある。その土地に根付いて、耕し、作物を育て、大地の智慧を受け継ぐのが「土の人」。旅を続け、情報の媒介者になるのが「風の人」。地域活動には、その両方が必要だといわれる。自分自身が「土の人」ではないと気付いたのは、いつだったろう。それでも、石巻が大好きだったからこそ、5年間ここで過ごしてきた。最終号を決めたときには、複雑な思いがあった。仮設住宅がなくなるまで継続するのも一つの選択だろう。一方で、活動を資金的に支える助成金プログラムは年々減少し、資金調達が難しくなってきた。これが現状だ。担い手の問題もある。私には東京で暮らす夫がいる。いわゆる別居婚だ。今は夫も私の生き方を応援してくれているが、そう何年も別居というわけにもいかない。5年という歳月を経て、

住民さんの声

毎号どの記事も楽しく読んでいました。医療・健康系の記事が特に良かった。生活不活発病の記事が印象に残っていて、家族に自分が今どういう状態なのか、なかなか自分の口からうまく伝えられないので、家族にも読ませたりして、自分の状態を理解してもらった。立ちました。(仮設山崎前団地 Eさん)

新聞自体が終わるのも残念だけど、全国各地からいろんな人が新聞配布のボランティアに来て、それぞれ面白い人たちの出会いが楽しみでした。メールアドレスを交換したりして、今もたまにやり取りが続きような人ができたのが何よりの宝です。(桃生地区の仮設住宅 Kさん)

私自身は仮設住宅を出てしまったのですが

私たちが支援者の生活環境も変化し、人生の新たなフェーズを迎えている。資金難に担い手不足。それでも、頑張れば半年、一年延命することは不可能ではないだろう。だが、仮設住宅が解消するだろう2、3年後までとなると難しい。ならば、震災から5年を迎える今が「引き際」か、という結論になった。決断の裏には悔しさもあつた。住民さんにとっては「震災から5年」は何の節目でもない。仮設住宅を出て新しい住まいに移る、その時こそが節目となるはずだ。その瞬間まで、住民さんの心に寄り添い続ける新聞でありたい。私が結婚して以来、金調達のスキルがあれば、あるいは活動を続けられたかも知れない。そんな気持ちがかえなかった。これまで新聞の発行や配布に関わってきた同志たちに、最終号の意

が、出てからも上品の郷に寄ったときにもらつてきて、毎号楽しく読ませてもらいました。私たちのことを忘れてはまだ続けてくれているんだなと、とても励みになっていました。いままでどうもありがとうございました。(蛇田地区 Sさん)

私もこの春に復興公営住宅に移ります。私としては、ちょうど、長かった仮設住宅での生活の終わりと仮設きずな新聞の最終刊が重なり、何だかとても感慨深いです。荷物は減らして引越したいけど、これまでのきずな新聞は捨てずに持って行って、たまに読み返したいなと思っています。(南境第7団地 Sさん)

私は門脇で被災して仮設住宅で約4年間暮らし、復興住宅に移った今も、高齢の母を介護するのに仮設住宅に通う日々であります。仮設きずな新聞は創刊当初から拝見して

「仮設きずな新聞」は今号をもって終刊します。終刊に際し、ボランティアや住民の方々にメッセージを寄せていただきました。今日までご愛読、どうもありがとうございました。

ますが、記事の内容はますます充実し、非常に読み応えがあるものになっていて、いつも届くのがとても楽しみです。今は復興住宅に移りましたが、私自身も読みたいこともあり、ぜひ読んでほしいです。復刊を祈っています。(蛇田地区 Mさん)

この新聞が終わってしまうのは、ショックなことであり、悔しい気持ちでいっぱいです。でも、この新聞がここまで続いてきたことには感謝申し上げます。(蛇田地区の復興住宅 Mさん)

や運営に関わる人たちのやり甲斐にもなっていたのだ。カタチを変えて、続けていけるかも知れない。一人ひとりと対話を重ね、希望は確信に変わった。自己犠牲の上に成り立つ支援活動の物語はもう終わりで。これからはやりたい人が、やりたいことをやる。そんな支援のカタチがあつてもいいのではないかと。私はこれからは「風の人」として、石巻で暮らす「土の人」と共に、新聞という手紙を書き続けていくつもりだ。仕事ではなく、ボランティアとして、発行頻度は減らさず、配布もすべて手渡しとはいかないかも知れない。けれど、ひとつの始まりは、ひとつの始まり。また出会える日を、楽しみにして欲しい。

◆ピースボート災害ボランティアセンター「仮設きずな新聞」編集長 岩元 暁子

こんにちは、街づくりまんぼうの河谷です。2012年8月から55回にわたり、中心市街地の復興まちづくりについてご紹介して参りました。記事を通して少しでも「まちなか」に興味を持って頂けたら何よりです。

まちなかって、どい？

「もはや中心市街地ではないよねえ」と思われている方、多くいらっしゃると思います。確かに、郊外の方が大型の店もあつし、住宅もたくさん作られたつあり、石巻の中心川蛇田は間違いないかもしれません。それでもなお、北上川と中瀬のある、駅前のある商店街のあるまちが「まちなか」だと信じ、時間とお金をかけてまちづくりが行われているの何故でしょうか？

それは、まちなかの魅力を感じ、それを磨き、未来へ残していくこととする多くの人がたがっているからです。

まちなか行くをもう一度

石巻に来ていろいろな方から聞いた、私の好きな言葉の一つ、それが「まちなか」です。この言葉をもう一度石巻の人たちの合言葉にしたい。私が記事を書くときに、いつも思っていることです。欲しいものが売っている。何か目新しい商品が売っている。そんな「ワクワク」がある場所、そこにいくことを「まちなか行く」と表現するのだと思います。ワクワクをもたらすものは、モノだけではありません。まちに行く面白



▲昭和期の立町大通り(グラビア石巻より)

まちなか情報局でお伝えしてきたのはそんな、「このまちを素敵にしていきたい、残していきたい」と思う方々の活動の一端です。

人に出会える。あの人に会える。そんな「人」を介したワクワクもあるでしょう。

まちが便利であることは大事です。暮らしやすいことも大事です。多くの観光客に来てもらうことも、そのために魅力的なお店や場所があることも大事です。それらと並行して大事にしなければならぬこと、それは「ここに行けば何かがある」、もっと言うと「ここに行けば何かあるかもしれない」「誰かがいるかもしれない」という予想外な「かもしれない」要素だと思います。

技術が進み、あらゆることが予測可能に便利になっても、予想もしなかったことが起こる、思いもよらない人に出会える、そんなワクワクを与えてくれるのが「まちなか」。まちは一人ひとりがつくっていくもの。多くの人の参加と協力があればあるほど、足し算的にまちは予測がつかない、魅力的なものになっていくと思います。

読者の皆さまが一日も早く、「まちなか行く」という言葉を合言葉として使うことができ、日が来ることを心より願うとともに、これからそんなまちなかが実現できるよう日々邁進して参りたいと思います。

(まんぼう かりや)

編集後記

2011年12月に記者になり、翌年7月に編集長になりました。発行日前夜、栄養ドリンク片手に何度徹夜したでしょう。時には39度の熱にうなされながら、はたまたメキシコや常総、船上でも新聞を書いてきました。思い返せば、毎回様々な苦勞を乗り越えて、我ながらよく続けてきたなと思います。

毎号、編集後記を書くたびに、「最終号の編集後記を書くときはどんな気持ちだろう」と想像していました。悲しいかな、寂しいかな、もう徹夜しなくていいんだとホッとしているかな。まさか、こんなに噴れ噴れとした気持ちなどは予想していませんでした。

ひとつの終わりは、ひとつの始まり。いまは新しいスタートにワクワクがいっぱいです。また必ずお会いしましょう。その日、その時を、心から楽しみにしています。(ピースポート あき)

■仮設きずな新聞とは… ピースポート災害ボランティアセンター(PBV)が2011年10月より、石巻市内の仮設住宅に向けて発行・配布する無料情報紙。コンセプトは「仮設住宅での暮らしに役立つ情報を届ける新聞」「ココロが元気になる新聞」。毎月10日、25日発行。毎号約5,500部発行。

■仮設きずな新聞は以下の場所でも手に入ります。
あがらいん、イオンモール石巻、いしのみ☆キッチン、石巻市社会福祉協議会、IRORI石巻、おしかのれん街、かめ七呉服店、からころステーション、川の上・百俵館、道の駅「上品の郷」、まじやらいん(上釜)、宮城クリニック、復興大学、包括ケアセンター(開成)、ピースポートセンターいしのまき

■「仮設きずな新聞」編集部 所在地
ピースポートセンターいしのまき(10:00-18:00/日祝定休)
〒986-0824 石巻市立町1丁目5-21(ことぶき町通り商店街内)
TEL:0225-25-5602 FAX:0225-25-5603 Email:kasetsukizuna@pbv.or.jp

- 発行元 ピースポート災害ボランティアセンター(PBV)
- 協力 開成仮診療所/キャンパス東北/震災こころのケア・ネットワークみやぎ/街づくりまんぼう/復興大学/包括ケアセンター/真如苑救済ボランティア(SeRV)
- 助成・協賛 認定NPO法人ジャパン・プラットフォーム(JPF)
- 編集委員 伊東 孝浩/河谷 智大
高柳 伸康/西村真由美
西本健太郎/野津裕二郎
藤戸 孝俊
- 編集長 岩元 暁子
- 配布統括 田上 琢磨
- デザイン 矢野 瑛子
妙本 咲季